

※記事の転載にあたっては、医療法人社団やまもととして、河北新報社および記事配信元の共同通信社より二次利用の許可をいただいております

# 東大病院辞め登米に通う医師

# かわるかえる

# 循環型医療で地域守る



自宅で1人暮らしを続ける千代村(右)の健康状態をチェックする田上。目を見つめて話し掛け、声や体の反応を確かめる。スタッフ(奥)がその場で記録していく=登米市

## 震災機に決意「在宅」に力

「宮城で一番、医師が足りないのは登米市だ」。県庁に電話で聞くと、担当者は「登米」と答えた。聞いたこともない地名だった。すぐ登米市民病院に連絡し、仕事が休みの日曜日に、1年ほど東京から通った。1年ほど東京から通って当直を受け持つことにした。

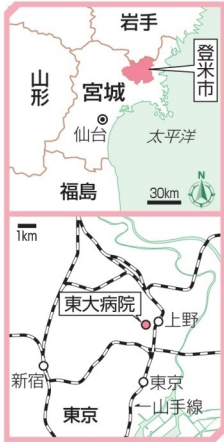
地元の医師と話すと、地元の医師が来たと話題になったが、「どうせすぐ東京に帰るんでしょ」という冷めた言葉も耳に入った。田上は自分も含め、医師が長く働き続ける方法を探った。

「ゆつくりペースでましようね」。昨年10月、登米市の一軒家。田上が手を動かして手本を見せると、ベッドに腰掛けた1人暮らしの千代村とし子(85)がまねをした。「もうすぐお誕生日です。ね。長生きしてください」と手を握る田上は、千代村は「先生のおかげでこんな悪いの。ありがたい」とほほえんだ。

「宮城で一番、医師が足りないのは登米市だ」。県庁に電話で聞くと、担当者は「登米」と答えた。聞いたこともない地名だった。すぐ登米市民病院に連絡し、仕事が休みの日曜日に、1年ほど東京から通った。1年ほど東京から通って当直を受け持つことにした。

地元の医師と話すと、地元の医師が来たと話題になったが、「どうせすぐ東京に帰るんでしょ」という冷めた言葉も耳に入った。田上は自分も含め、医師が長く働き続ける方法を探った。

「ゆつくりペースでましようね」。昨年10月、登米市の一軒家。田上が手を動かして手本を見せると、ベッドに腰掛けた1人暮らしの千代村とし子(85)がまねをした。「もうすぐお誕生日です。ね。長生きしてください」と手を握る田上は、千代村は「先生のおかげでこんな悪いの。ありがたい」とほほえんだ。



「寒くなってきたけど大丈夫？」。高齢の女性宅を訪れた医師の田上佑輔(41)がベッド脇にかがみ、相手の目を見詰めながら聴診器を当てた。

東大病院を辞め、田園風景が広がる人口約8万人の登米市に「やまと在宅診療所」を開いたのは2013年。週前半は軽乗用車で看護師らと1日約10軒を診察して回る。後半は妻子のいる東京に戻り、首都圏の診療所で仕事を続ける。

田上は都会と地方を医師が行き来する働き方を「循環型医療」と名付けた。医師不足解消の一つとして注目される。きっかけは11年3月11日の東日本大震災。医療ボランティアへの参加が、活動の原点になった。

でも多くの命を救いた」と意識込んだ。しかし、思いがけない患者の死や病気の再発に直面し、「どうしてこの道に進んだのか」と限界を感じた。葛藤を抱え、面識のない企業経営者や政治家、官僚に次々にメールを出した。実際に会うと、「何のために生きるのか」と質問をぶつけると、人生の先輩たちは真剣にアドバイスをくれた。大宮城実行隊」を設立。避難



米どころの田園地帯に夕日が沈む。田上とスタッフが乗る診療所の車が、この日最後の訪問先へ急いだ=登米市

「生活リズムができていて大変さは感じない。高齢化などの社会課題が多い地域で働くのは医師としてもプラスになる」。そう語る田上が運営する診療所は規模を拡大して市民病院の近くに移転。神奈川県や岩手など計6カ所に広がり、約50人の医師が「週4回」「土日だけ」と自分の生活に合わせて働く。

### 「菅波先生」のモデルに

登米市などを舞台にしたNHK連続テレビ小説「おかえりモネ」で、田上は、田上が実践する「循環型医療」がモデルになった。清原果耶が演じる主人公の永浦百音への菅波の不器用な恋愛表現に共感した視聴者が、ツイッターに「#俺たちの菅波」のハッシュタグ(検索目印)を付けて感想を投稿し盛り上がった。

# かわるかえる